

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：34312

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K01142

研究課題名（和文）実社会と連続性を有するコミュニケーション能力の学修のためのプログラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and Evaluation of a Learning Program to Improve Communication Skills in Alignment With the Real World

研究代表者

平野 美保（HIRANO, Miho）

京都ノートルダム女子大学・国際言語文化学部・教授

研究者番号：40631411

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、実社会に資するコミュニケーション能力の学修のためのプログラムを設計し、実施の上、それを評価することを目的とした。そのため効果的な育成方法について、これまでの研究成果を基盤に学修プログラムを設計し、実施の上、学修者に対して調査を行った。その結果、本学修プログラムでは、学修者自身が自己課題を認識し、主体的に知識、技能、態度を向上させていく特徴がみられた。また、基礎を基盤とした応用的学習が実社会へのスムーズな移行に結びつき、職場での応用が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、大学生に対して、実社会で役立つコミュニケーション能力を育成するため、これまでの研究成果を基盤に学修プログラムを設計し実施した。その上で、学修直後、就職活動終了後、そして就職後に学修者に対して調査を行った。その結果、本学修プログラムの特徴や学修の意味や意義が明らかになった。このように、実践的な研究として実施し、また、社会で重要視されるコミュニケーション能力に関する教育方法を提案できたことから、学術的および社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to design, implement, and evaluate a learning program for fostering communication skills that contribute to the real world. To this end, we designed a study program based on results of previous research on effective training methods and conducted a post-treatment survey of the students. Results found that the program was characterized by students' recognition of their own issues and proactive improvement of their knowledge, skills, and attitudes. In addition, applied learning based on basic communication learning led to a smooth transition to the real world, suggesting practical applications in the workplace.

研究分野：教育工学

キーワード：コミュニケーション能力育成 学修プログラムの開発

1. 研究開始当初の背景

文部科学省の「学士力」や経済産業省の「社会人基礎力」にみられる通り、実社会で役立つ有為な人材の育成が大学に求められている。そのため、実社会に出る前の学生だけでなく、社会人になった卒業生が、大学時代のこれらの学修経験を、どのように受け止め、効果があるのか検討していく必要がある。しかしコミュニケーション能力の育成に関する研究は極めて少なく、さらにコミュニケーションに関する学修内容を検討し、その実施による実社会での効果について検証した研究はみあたらない。

報告者は、これまで話のわかりやすさ（例えば内田 2005）や印象（例えば洪 1993）に関連が深い「音声」に注目し、大学生のための音声行動学習プログラムを開発し、実施の上、分析・評価をしてきた（平野 2010 など）。これらの成果を踏まえて、「コミュニケーション能力向上のための音声表現スキル学習プログラムの開発と評価」の研究を進めてきた。「音声」というミクロの視点を捉えて協同的な PBL 型の授業を実施し、音読から朗読への変化という音声表現スキルだけでなく、授業への受動的な参加から能動的な参加への変化、人前で話すことに対する苦手意識の克服、授業外での応用など、関連する多くの肯定的な効果に繋がっていることが明らかになった。また、中央教育審議会（2012）は、「学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を習得できる」と述べているが、数多くの主体的な学修体験が必要であり、これまで「音声」に焦点化してきた研究枠組みを広げ発展させ、「コミュニケーション」に注目し、この能力育成に向けて、学修プログラムの開発と評価をしていくことが必要であった。

2. 研究の目的

本研究では、実社会で役立つ学修プログラムを開発するために、「コミュニケーション」関連の複数の授業に、社会で求められている能力、「動機づけ」や「環境」等の理論、報告者のこれまでの研究成果を反映させ、関連の諸能力の育成につながる学修プログラム（複数の授業から構成）を設計し、実施の上、i) 受講生、ii) 学修プログラム内の複数の授業を履修し、就職活動を終えた学生、iii) 学修プログラム内の複数の授業を履修してきた卒業生（社会人）の認知面、感情面、行動面について調査・分析し、各学修および学修プログラムの効果を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) これまでの研究知見に加えて、大学生の就職活動とその支援の状況からコミュニケーション能力育成に向けて考察をしたうえで学修プログラムを設計した。その考察にあたっては、大学生の就職活動、大学におけるキャリア支援、正課におけるコミュニケーション能力育成の視点から検討した。その上で、学修プログラムを設計した。

(2) 設計した学修プログラムを実施し、授業ごとに自由記述を中心にしたアンケート調査を実施し、学習者の認知面から学修プログラムの特徴を検討した。

(3) 就職活動を終えた学修者（4 年次生）に対して半構造化面接を実施し、発話記録から作成した逐語録をデータとし質的データ分析手法 SCAT（大谷 2019）を用いて分析し、学修プログラムの有用性を検討した。

(4) コロナ禍によって、学修者の状況に変化があることが考えられたため、大学でのコミュニケーション能力育成に向けて、学修者の変化と指導上の留意点について検討した。まずコロナ禍によるコミュニケーションへの影響を検討するため、マスク着用と身体的距離の確保による影響と、自発的コミュニケーションへの影響を概観した。次にコミュニケーションに関する実践的学習に関する影響を検討するため、児童生徒のコミュニケーションの機会や学校での実践的活動、さらにコミュニケーション能力育成に関連する心の問題について考察した。

(5) 本学修プログラムの学修者である卒業生（新入社員）に対し半構造化面接を実施し、発話記録から作成した逐語録をデータとして質的データ分析手法（大谷 2019）を用いて分析した。その上で本学修プログラムを評価した。

4. 研究成果

(1) 学修プログラムの設計

①大学生の就職活動とその支援からコミュニケーション能力育成に関して検討した結果、正課において、日本語能力の向上、プレゼンテーションの方略、苦手意識や緊張感などの克服、他者とのかわりに基づいた思考の言語化、ビジネスマナーの知識と習慣化の支援が必要であることが推察された。また、正課において授業者が留意することは、動機づけおよびモチベーションの維持、他者との交流の充実、授業と実生活を結び付けた継続的な支援が必要であることが考えられ、学修プログラム設計に向けての示唆を得た。

②学修プログラムの設計においては、3つのモデル（図1）と全体像（図2）を設定した。前者では、これまでの経験や授業での実践を省察し、経験からの知識と、授業者や他の学修者など外部からの知識によって相互作用的にコミュニケーションに関する知識を獲得していく「相互

作用モデル」、日本語表現、プレゼンテーション方略、思考の言語化に関する能力向上を、細分化、仮想、現実という三層で授業を展開していく「三層積み重ねモデル」、苦手意識の克服、学習意欲の向上、自信、責任、倫理の形成などがスパイラルに向上していくことを意図したスパイラルモデルである。後者では、基礎的な科目から応用的な科目まで、また、コミュニケーションに関する多様な視点で学修を可能とするとともに、「動機づけの維持」「他者との交流」「実生活・他の授業」を各授業に採用するようにした。学修プログラムの内容は、口頭表現の基礎学習、「書く」ことを通しての日本語表現の学習、プレゼンテーションの学習、統合的学習の4項目とした。

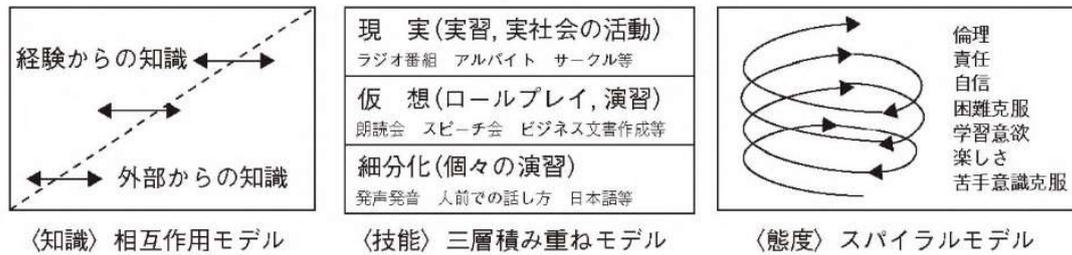


図1 3つのモデル

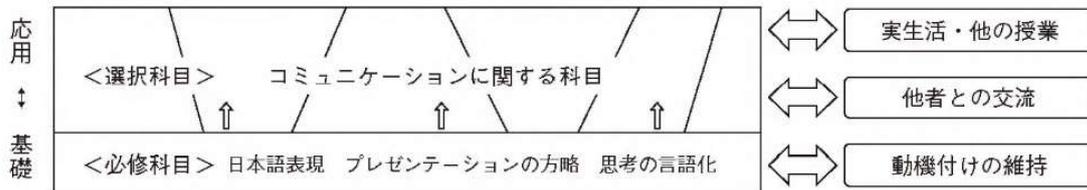


図2 全体像

(2) 学修プログラムの特徴

学修プログラムの特徴は、各科目の学習内容を中心に、知識、技能、態度において、学修者自身が主体的に自己課題について多様に獲得していくことにあった。

(3) 学修プログラムの有用性

就職活動を終えた学修者の認識面から、学修プログラムの実践によって、以下3点の意義が推察された。①「人前で話す」学習では、多様な内容・方法で練習を繰り返してきたことから、緊張感ある就職活動においても、冷静に状況を判断してコミュニケーションを取っていくことや、初対面の他の就職活動生とともにディスカッションをしたり、協同的に企画を考えプレゼンテーションをしたりと就職活動でも応用していくこと。②「書く」学習では、基礎を基盤とした応用練習が、就職活動へのスムーズな移行に結びついていくこと。③「統合的な学習(ラジオ番組制作)」では、望ましい音声行動への意識の変化に結びついていくこと。

(4) 指導上の留意点

コロナ禍を経験してきた大学生に対するコミュニケーション能力育成に関する課題として、コミュニケーションに関する能力差の拡大、実践的学習に関する経験の少なさ、コミュニケーションに関する消極的な者の存在、心の問題を抱えた者やその経験者の存在という4つの状況がみられた。それに伴いコミュニケーション能力育成において、次の8点について留意していく必要性が推察された。①学習者は実践的学習経験が極めて少なく、心の問題を抱えている者がいる可能性を踏まえ、学修者の実践的学習に関する認識等を把握できるよう準備しておく必要がある。②心の問題を抱えている学修者などに配慮しながらも過剰にならないよう、すべての学修者にとって有益になるよう取り組んでいく必要がある。③心に問題を抱えていた、ないしは問題が継続している学修者が、これまで以上に教室にいることを踏まえ、グループ編成に留意する必要がある。④学習意欲や能力差が広がっている可能性を踏まえ、指導者はファシリテーターとして学修者が望ましい方向に向かえるように努める必要がある。⑤対人コミュニケーションや人前での発話に対して苦手意識が強い学修者や、実践的な学修経験に対する不安感を持つ学修者が多いことを踏まえ、動機づけを丁寧に実施していく必要がある。⑥学修者同士のコミュニケーションや実践的な学修に対して肯定的になるよう導き、学修者が意欲や楽しさなどをもった段階で、高度な内容・方法に移行していく必要がある。⑦実践的学習の経験不足を補足するため、より多くの教示など「外部からの知識」が必要である。⑧相手視点の明瞭な発話方法に関して、高度なスキルを身につけている者が多数いることが考えられるため、この発話方法について「経験からの知識」として活用することが可能である。

(5) 学修プログラムの評価

学修者である卒業生(新入社員)の認識面から、本学修プログラムの学修者は、就職活動時だけでなく、新入社員としての職場でのコミュニケーションにおいても、緊張感の緩和や安心感、さらに自信を持ち、技能面においても、在り方の考察も含め、学修を応用していくこ

とが示唆される。すなわち、本学修プログラムは、大学から実社会への移行において、コミュニケーションに関する感情面と技能面を中心に有用であると言える。

<引用文献>

内田照久 (2005) 音声の発話速度と休止時間が話者の性格印象と自然なわかりやすさに与える影響 教育心理学研究 53:1-13

大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方—研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会

中央教育審議会 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (答申)

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (2015.07.31)

平野美保 (2010) パラ言語スキルに焦点化した音声行動学習プログラムの開発と評価—職業生活に向けたコミュニケーションスキル獲得の支援のために— 日本教育工学会論文誌 34 (1)、23-33

洪珉杓 (1993) 丁寧表現における日本語音声の丁寧さの研究. 音声学会会報. 204 : 13-30

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 平野美保	4. 巻 第82号
2. 論文標題 実社会と連続性を有するコミュニケーション能力向上のための学修プログラムの評価	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際ビジネスコミュニケーション学会 研究年報	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57330/jbca.2023.82_19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平野美保	4. 巻 19
2. 論文標題 コロナ禍での児童生徒の状況からみた大学生に対するコミュニケーション能力育成に関する提言	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 生涯学習キャリア教育研究	6. 最初と最後の頁 51-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平野美保	4. 巻 5
2. 論文標題 大学生の就職活動およびその支援からみたコミュニケーション能力育成に向けての考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 24-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 平野美保
2. 発表標題 実社会と連続性を有するコミュニケーション能力向上のための学修プログラムの評価
3. 学会等名 国際ビジネスコミュニケーション学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平野美保
2. 発表標題 音声表現研究をベースとした話しことば教育
3. 学会等名 京都ノートルダム女子大学(研究プロジェクト発表会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 平野美保
2. 発表標題 「話しことばプログラム」の有用性の検討 卒業生を対象としたインタビュー調査を通して
3. 学会等名 AASVET日本研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平野美保
2. 発表標題 実社会と連続性を有するコミュニケーション能力の育成に関する一考察 - 「スピーチの基礎」における学習者の認識-
3. 学会等名 国際ビジネスコミュニケーション学会2019年度第2回関西支部例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miho Hirano
2. 発表標題 Learners' Perceptions of the Japanese Oral Communication Course
3. 学会等名 Association for Business Communication 84th Annual International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平野美保・柴田好章・大谷尚
2. 発表標題 実社会と連続性を有するコミュニケーション能力向上のための学修プログラムのデザインの検討
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平野美保
2. 発表標題 大学生の就職活動からみたコミュニケーション能力育成に向けての考察
3. 学会等名 職業・キャリア教育学研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 平野美保	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 コミュニケーション能力育成 -音声表現研究をベースとした話しことば教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	大谷 尚 (OTANI Takashi) (50128162)	名古屋経済大学・人間生活科学部教育保育学科・特任教授 (33923)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	柴田 好章 (SHIBATA Yoshiaki) (70293272)	名古屋大学大学院・教育発達科学研究科・教授 (13901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関